

|||||  
書 評  
|||||

「アフォーダンス—新しい認知の理論」

佐々木 正 人 著

岩波書店 (1994) 117頁

本書は、近年の認知科学における主流「アフォーダンス」についての入門書である。アフォーダンスとは、アフォード *Afford* 「～を可能にする」をモチーフにした造語である。これは、人間が見たものそのものが情報であり、環境が動物に提供する「価値」、のことである。換言すれば、「すり抜けられる隙間」、「登れる段」、「つかめる距離」といったように、動物にとっての環境の性質を意味し、我々の環境にあるものは全てアフォーダンスの用語で記述が可能となる。

こうした心理学における視覚理論の新しい流れは、地理学、とくに空間認知研究を行うものにも決して無縁ではない。脳や心における情報処理を通して空間の認知が行われるという従来の考え方（情報処理モデル）は、たとえば、認知地図があっても、なぜ人は道に迷うのかという素朴な問いかけに、十分な説明ができなかった。このような問題に対して一つの答えとなるのが、1960年代に知覚心理学者ギブソンによって提示されたアフォーダンスの概念ではないだろうか。

その登場から30年以上経過したいま、認知科学、心理学、建築学、その他さまざまな分野で、なぜアフォーダンスが注目されているのか。プロローグでは、この点についてケプラーやデカルトの遺産ともいえる従来の視覚理論の問題点として、網膜内の小人理論や

「こころ」の存在の提唱といった説明に対する批判が平易に解説されている。

つづく第一章「ギブソンの歩み」では、知覚心理学者ギブソンの生い立ちに加え、ゲシュタルトとの出会い、そして網膜を主体とした視覚理論の問題に対するギブソンの取り組みについて触れられ、既存の視覚理論がどのように覆されていくのかを知ることができる。そして第二章「情報は光の中にある」では、アフォーダンスを生み出す上で、最も重要なステップである光の配列について語られると同時に、人間が自らを包囲する光からどのようにして情報を得るのか、そして世界を見、聞き、感じるために必要な情報、すなわち環境の中からの情報の抽出について語られる。

ところで、ここで述べる環境とは、何を意味するのか。そのヒントは、第三章「エコロジカル・リアリズム」に記されている。ここでは、環境・自己・アフォーダンスといった生態学的視点を語る上で欠かせぬ3つの要素について説明がなされている。著者によれば、環境「エンヴェイロメント」とは、我々人間を「丸く囲むもの」、すなわち生体光学的な視点では、そこが「情報に満ちた海」であることを示しているという。また、こうした環境、すなわち豊かな情報の海は、視覚のみならず、聴覚、触覚などによっても体験される。また、そのような情報（地理学的に考え

れば空間情報とでも言おうか)を適切に得ることができない、あるいは情報収集に制約を抱えるならば、我々の行動そのものにも支障をきたすことになることは容易に予想がつく。そうした点は、第四章「知覚するシステム」でのトピック、視覚に障害を持った人がどのように空間情報を収集し、行動しているのかといった話題にも通じていく。

第五章「共鳴・同調の原理」では、環境の中に情報を探索する知覚システムが、どのように制御されているのかというテーマが取り上げられる。すなわち、刺激から反応という従来の図式に依拠した人間行動を解釈する場合の矛盾点を指摘し、環境との共鳴・同調による行動制御について語られる。さらに、本章のエピローグ「リアリティのデザイン」では、AI(人工知能)研究におけるアフォーダンスの応用例が紹介されている。地理学を学ぶものとして興味深い点は、たとえば都市環境の創造においてアフォーダンス的な考え方が果たす役割であろう。この章では、都市におけるナビゲーションの事例が展開される。複雑な道程のナビゲーションや、他者への道程の伝達を目的としたナビゲーションは、冒頭で述べたなぜ人は道に迷うのかという問いかけに答える上でヒントとなろう。我々はある場所への移動ルートについて、人に説明したり、たずねたり、時には地図などを用いる

が、こうした表現されるもの、表現されたものをどのように扱うかという点に、従来の空間認知研究で混乱が生じていることが著者によって指摘されている。

このような点を踏まえ、人がどのような場所(環境)でどのような空間情報を得て、どのような行動をとるのかといった生態学的な視点は、人間の空間的行動を空間認知の側面から読み解く上で、ひとつの道を照らしてくれるのではないだろうか。すなわち、アフォーダンスという視点から、複雑化する都市環境における人間の行動を捉え、どのような環境でどのような行動を選択しているのかを考察し、行動に必要な空間情報を地図という形に要約・表現することができるならば、第三者的な立場から、ある個人の知覚環境、行動環境を視覚的に捉えることが可能となろう。これは、バリアフリー環境構築のための情報収集としても興味深い研究であり、まさしく地理学の社会に対する貢献のひとつの形である。もともと、地理学における空間認知研究は、理論・方法論など多くの部分で心理学とのつながりが深い。本書は、心理学の視点から書かれてはいるが、こうした他分野からの新しい考え方は、地理学での応用を図る上でも欠かせぬ糸口となろう。

(立命館大学・院 本間昭信 記)